

去年の日記

六 郎

凡そ過ぎ去つた年月の日記を繰り返して見る程思ひ出多いものは少いが、別けて去年の今日此頃の日記位思ひ出の種となるものはあるまい、去年の今頃は自分は静岡の講習會に出席し朝から晩まで吾が師大下先生の御側に居て樂しき日を暮らしたのであつた、先生は十二月の二十九日に東京を立たれて清水にて魚伊とか云ふ御世辭にもあまり賞められない小さな家であつた、自分は二日の夜此宿に着いたのだ、着いた時の此家の感じはいゝ方じゃなかつた、暗い煙つた様な丁度魚伊と云ふ不景氣な名前に相當した程度の家であつた、こんな家で之に準じた食物を喰べては居た、が然し此家の二階に於ける一週間の生活は非常に面白かつた、水繪趣味に生活するさへ樂しきかて、加へて快活なる先生や其家族の方々と一緒に居るのであるからして面白からざるを得ない譯なのだ、凡ての愉快と云ふことが食、住、の不足の點を補ふて餘りがあつた。

日記を開けて見るとこんな事が記してある「愈々今日より水彩畫講習會始まる、午前は物産陳列所の二階で大下先生畫を見せて講話さる、午後は淺間神社に寫生に行く、山の上だの何だの正男さんと一緒に歩き廻つていよいよ描き出したのは二時、

三時半になつたら歸らうと正男さんと竹内さんが来る、輪廓だけで歸宿、夜は安田屋に講話と茶話會があるので行く（一月三日晴暖）などである、物産陳列場の二階で親しく説明された御様子、未だに目の底に残つて居る様な氣がする、其當時説明のために使はれた御作品は今でも奥様の所へ伺へば拜見が出来、然し其當時の先生を今、何處へ行つたら見出すことが出来るやうか。

また一月四日の所には「午前は内堀とて舊城内にて寫生す、堀端の芝の上に三脚を据えて暖き日を沿びつゝ四ツ切をなぐる」などある、

あの背の高い先生が堀端を下りたり上つたりして、批評して廻はらるゝ様か思ひ出される、先生の批評は丁寧であつて且つ我々の様な碌な素養もない者でも解る位に適切であつたことを自分は覺えて居る、此丁寧、且適切なる先生の批評は一つには先生が日本に水繪を普及されやうとする大抱負によりて生じ、又一つには先生の親切にして然も常識に富んで居られたと云ふ性質から發したものだと自分は考へて居る、然ももう二度と此批評を煩すことが出来ないことになつてしまつた。

一月六日には三保へ寫生遠足をした、一體二三人で行くのも寫生遠足位に興のあるものはないのに此日は講習會員一同と云ふ多人數、先生は居られるし補助として赤城君まで來られる、遊び仲間の正男さんも行かれたのだから、之位面白い事はめつたに無い。輕便鐵道の中も面白かつたし船の中も愉快だつ

た、正男さんの所謂ハモロモロの松を初めて見て、前に渺々たる大平洋を見て腰を下した氣持は實に何とも云へない位によかつた、西風がふき付けて吹き付けてとうとう船の蔭へ這入つて正男さんと共に辨當を喰べた、こんな面白いことも講習會があつたからこそだ、自分はどうしても大下先生の講習會がなつかしい。

會期僅かに一週間の講習會であるから講話は常に夜であつた、夜食をすまずと先生講話に五六丁離れた安田やに出かけられる、自分も御供しては拜聴する、が何にしる講師としては生きりだから一時間半位はどうしても可なりの聲で、話つゞけられる、随分咽喉を使はれる譯だ、此講話を然も熱心なる先生は一日も止められなかつた、會期の中頃より風を引かれて咳をなすつたりして可なり講話をなさるのが苦しい様だつた、が先生は大抱負を行ふに付て、こんな事では敢て妨げられなかつた、先生の熱心なものにはつくづく自分は感心してしまつた、焉ぞ知らん此熱心なる點が悪魔の窺ふ所と遂ひになつた。

一體先生に自分が名前を覚えて頂いたことは、そんなに古い事じゃない、此六年この方のことである、然し乍ら此六年と云ふ年月は、自分の趣味の涵養とか、養生とか云ふ點から考へて見ると、今迄自分の經來たつた期間の中で最も効果を被つた時代に相違ない、世にもよく趣味のない人間程不幸な者はないと云ふ、此尊い趣味を自分に抱て養ひ得たのは實に先生の御蔭なのだ、六年の年月短しと云ふ勿れだ、此間に養はれたる趣味

は永久に存續する。

唯に趣味が養成された計りではなかつた、初めて御目にかつた折には碌に描けもしなかつた自分が、此頃では兎にも角にも素人なみには描ける様に技術も進歩した、此技術の進歩と云ふことは前にも話した先生の丁寧、且適切なる批評に負ふ所が頗る多いと云はざるを得ないのである、更に一步をすゝめて考ふるに目にも見えぬ、自分にもよくは解らぬが先生が常に口にし玉へる人格の修養と云ふことも、出來たのであるかも知れない、否な出來たのであるに違ひない、然るに此自分の趣味、技術、人格、の養成者たる所の先生を、突然に奪ひ去られてしまつたのである、去年の日記を繰返して讀む毎に、自分は奪ひ去られたと云ふ事實の甚しく不幸なることが、痛切に感ぜられて足らない。

顯し世を假寐の夢と思ひつゝも

忘れ難きは人にぞありける

遺稿の中より

嬉し記 (故大下氏遺稿)

嬉しと思ひしことは、忘れがたきものなり、殊に眞の愛によりて色どりせられし嬉しき事は、常に忘れがたきものなり。駒込を通ることに吾の忘れんとして忘れがたきは、この種の嬉しき事なり。夏の日、吉祥寺の前を王子の方へと過る人は、今